

脊椎外科の進歩は、主にはテクノロジーの進歩によるところが大きく、特に1980年以降の進歩は目覚ましいものがあると思う。画像検査は、1982年以降脊椎疾患に対応できるCTが開発され、1987年以降はMRI、さらにはMRIからPETへと発展した。今回の特集である歯突起後方偽腫瘍も、まさにテクノロジーの進歩により広く知れ渡るようになった疾患である。1986年Szeの報告に始まるこの病態は、まさにMRIの普及によるところが大きい。CTがなかった時代に油性造影剤を用いた脊椎造影検査で上位頸椎部位を描出するのは相当な技術をもってしても難しかった。水溶性造影剤になって、頸部の細部の病変の描出が可能になったが、C1-2の側方穿刺などの工夫はされたものの、やはり上位頸椎部病変の描出はなかなか難しかった。歯突起後方偽腫瘍は、おそらく以前からあった病変であったが、MRIの出現によってそう苦勞なく見出すことができるようになった。このような疾患は病態や診断よりも手術法に議論が移りがちであるが、本号では病態と治療がバランスよく掲載され、読者にとっては実臨床にすぐに役立つものと思う。

手術機器の進歩も同じで、インストゥルメントの進歩はロッドからペディクルスクリューに発展した。手術も最小侵襲手術が普及し顕微鏡から内視鏡へと発展した。手術機器の発展は手術適応の拡大を生み、手術適応の拡大はさらなる新しい機器を生んでいる。今、新技術のマーケティングにおいて幅広く使用されている用語にハイプサイクル（Hype Cycle）という言葉がある。この用語は、特定の技術の成熟度、採用度、社会への適用度を時間経過とともに説明するもので、脊椎の手術もこのサイクルで説明できる。ハイプサイクルは次の5つのステップからなり、①黎明期（Technology Trigger）、②流行期（Peak of Inflated Expectations）、③反省期（Trough of Disillusionment）、④回復期（Slope of Enlightenment）を経過して、⑤安定期（Plateau of Productivity）に入る。昨今、脊椎手術のこのサイクルが、特に米国では早くなっている。しかし、このような時代であるからこそ、先人によって培われてきた従来の手術法がもつ実績の重みも高く評価されるべきであると思う。

（田口敏彦）

脊椎脊髄ジャーナル

編集顧問

萬年 徹 高橋 昭 金田清志
小山素磨 小柳知彦 田代邦雄
国分正一 服部孝道

編集委員

徳橋泰明（編集委員長）
金 彪（副編集委員長）
青木茂樹 亀山 隆 園生雅弘
高橋敏行 高安正和 田口敏彦
谷 論 中村雅也 根尾昌志
飛驒一利 松山幸弘 山崎正志

Vol. 31 No. 10
(2018年10月25日発行)

毎月1回25日発行

1部定価（本体2,300円＋税）

（配送料別）

年ごめ予約購読料30,700円＋税

送料弊社負担

発行／株式会社 三輪書店
代表者 青山 智

〒113-0033

東京都文京区本郷6-17-9

本郷網ビル

TEL 03-3816-7796

FAX 03-3816-7756

URL <http://www.miwapubl.com/>

（担当：山岸）

印刷所／三報社印刷株式会社

TEL 03-3637-0005

広告申込所／

（株）文栄社

TEL 03-3814-8541

（株）ハイブリッジエージェンシー

TEL 03-3814-0089

本誌の内容の無断複写・複製・転載は著作権・出版権の侵害となることがありますのでご注意ください。

Published by MIWA-SHOTEN Ltd.
6-17-9 Hongo, Bunkyo-ku, TOKYO © 2018,
Printed in Japan

JCOPY 〈出版者著作権管理機構 委託出版物〉

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（電話 03-3513-6969、FAX 03-3513-6979、e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。